

国語

現代の国語，言語文化

〈近代以降の文章〉

1. 開始の指示があるまで，この問題冊子を開かないでください。
2. 机上には，受験票，黒鉛筆，消しゴム，時計以外のものを置かないでください。
3. 受験票と机の上に貼ってある受験番号が同じかどうか確認し，問題冊子と解答用紙のすべてに受験番号と氏名を記入してください。
4. 解答は，すべて解答用紙に記入してください。
5. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は，手を高く挙げて監督者に知らせてください。
6. 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行動が見受けられた場合は，監督者が注意をします。
 - ③ 不正行為を行った場合は，直ちに受験を取りやめさせます。
7. 試験終了後，この問題冊子を持ち帰ってください。

受 験 番 号	氏 名

問題は **一** から **三** までで、一ページから十五ページまであります。確かめなさい。

解答は解答番号 **1** から **24** までにマークしなさい。

一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

いつの時代にも、子どもたちは、その時代の中心に位置する大人の文化を生きず、その異質性をあらわにして大人との差異を顕在化させてきた。しかし、その差異がおおらかに受け止められ、「子どもとはそんなもの」と大人たちに許容されていた時代もあり、逆に、その差異に大人たちが過敏となって、「いまの子どもは」と嘆きの種にする時代があることも事実であろう。とすれば、この両者の違いが意味するものは何か。

前者の場合、訪れる次代の方向が明確であり、変化の速度もまた緩慢であって、子どもたちが生きるであろう次の時代が予測可能であるため、大人たちは、次の文化を「先取りした」子どもらの言動を、^ア おおらかに許容し得たのであろう。一方、変化の速度が人々の適応を上回るだけでなく、変化の方向も予測不能であって次に訪れるであろう近未来が不安視されるとき、子どもたちが示す大人と異なる一挙手一投足が人々を混乱と不安に陥れるのではないか。こんな時、大人たちによって「子ども」は「異星人」とされ、「何を仕出かすか分からないコミュニケーション不能の存在」として忌避され兼ねないのである。

いま、子どもに対する忌避感情が高まりつつあるとすれば、そして、時

にそれに対抗するかのようになり、子どもたちの「暴発」と見える言動が私たちを驚かせるとすれば、変化する時代の動きに大人たちが従い得なくなっていることの証しではないか。時々刻々、変化し続けるこの時代が、それを先取りする「子ども」たちと、確立した文化価値のなかで時代の要求する生産活動に従事する「大人」たちと、この両者の共存を従来になく困難にしていると言えそうである。

たとえば、子どもや若者の世界で、メディアを賑わすような異常事件が起こると、大人たちが先ず飛びつくのが「原因探し」という常套化した試みである。新聞やテレビの情報系番組企画として、社会学・心理学・教育学あるいは弁護士など、少年事件等に関連のありそうな有識者たちが駆り出されて、事件の原因をめぐるコメントを求められ、彼らは、その道の専門家として交々各自の見解を披露する。たとえば、事件当事者の家庭や学校の人的・物的環境について、とりわけ、母親や担任教師との関係について、等々……。

しかし、それらの半ばステレオタイプ化した見解は、その事件の原因究明にも、あるいは類似の事件の再発防止にも役立ち得ない場合が多いのではないか。なぜなら、さながら後追いのように、類似の事件が発生し、しかも、後発事件の当事者と、先行した事件の該当者との間には、格別の類似点が見いだし得ない場合も少なくないのである。「彼は、日常的にはごく普通の子ども（若者）だった」という、最近多用される結びの言葉は、あたかも、空しく探しあぐねた原因の在りかを物語っているかのようだ。これら現代の子どもや若者の起こす事件たちは、既製のコンセプトで語られることを拒むとも言うのだろうか。

しかし、彼らの言動には一つの特徴を見いだすことが出来る。それは、家庭や学校の問題点であるにまして、彼らの「いまの暮らし」を支配している極めて現代的な「ものやこと」との関係である。彼らと、それら「ものやこと」との類のない結び付きの強さに思い致すなら、親や担任教師と言えども、その間に割って入ることは難しいと思ひ知らされるのではないか。

たとえば、かつて世間を震撼させた「神戸連続児童殺傷事件」^{注1}に関して、まず、彼が実行した最初の事件の際に、家人のだれもがそれに気付かなかったことが、事件をさらに重大化させたとして、家人が非難に曝される。家族内の相互無関心が、次の事件を抑止出来ず、相次いで悲惨な事件を生させたと言うのである。仮に、彼の衣服の汚れに母親が気が付き、あるいは、金づちやナイフなどを持ち歩く彼の異様な言動を訝しく思っていたら、などと、評論家的言説は家庭内人間関係の希薄さについてさまざまに指摘している。しかし、どの家庭にも洗濯機が在ることが当たり前で、汚れた衣服は洗濯機に投げ込んでしまえば簡単に処理出来る現在、中学生になった子どもの衣服の汚れなど、特に注目する母親のほうが珍しいとさえ言えよう。あるいは、子どもの個室には、彼のプライバシーを守って母親さえも入ることをためらうのが現在の暮らしぶりであるとすれば、彼が何を企て、どう準備しているかなど、把握し得ないのも当然であろう。「洗濯機」や「子どもの個室」という現代的事物が、彼の日常と密に結び付き、彼らと家人との間には従来と異なる強固なバリア^イが形成されているとすれば、思春期の子どもに対して親の配慮が足りなかったと、誰が非難することが出来るだろうか。

また、「長崎小六児童殺傷事件」^{注2}では、新来のメディア・ツールである携

帯電話が問題とされた。すなわち、相手を傷つけるような携帯メールのやりとりが、常には仲良しであった加害者を激昂させ、彼女を、突然のように凶行に及ぼせたという解説である。しかし、この場合、注目を要するのは、メールで送られた文言やその内容にもまして、メールによって変質を余儀なくされた「言葉の機能」ではないか。たとえば、些細なきっかけで相手を貶めたり、あるいは脅したりすることは、仮に女兒の親友同士であったとしても、これまでもさほど珍しいことではなかった。仲良しの友人に絶交状を叩き付けるとき、そこには、しばしば、相手を攻撃し相手を貶める過激な文言が連ねられていたのである。

しかし、面と向かって口で罵り合うことや、手紙で相手を痛罵することと、それら相手を侮る文言がメールに乗せられて飛んでいくことは、その効果は必ずしも同じではない。何しろ、対面的な喧嘩であれば、相互に罵言を投げ掛け合いつつも、それに対する相手の顔付きや返答など敵対者の反応が見えることで、思わずも攻撃の矛先を鈍らせてしまうことも稀ではなかった。また、手紙の場合、メールの場合と圧倒的に異なるのは、綴られた言葉が相手に届く速度であろう。瞬間に閃いた殺意も、またそれを表現する罵詈雑言も、メールによって瞬時に相手に送り届けられ、また、送信者がそのことを顧みる余裕もないほどの素早さで、相手からの返事が送り返されてくる。「お前なんか大嫌いだ」という送信に対して、「お前なんか死んじまえ」という返信の素早さ……。

対面の場合は、「大嫌い」と罵る言葉は、相手の当惑気味な表情によって修正されることもあり、あるいは、受け手の悲しげな表情によって発言者の殺意が和らぎ、自ずから沈静させられてしまうこともあり得よう。また、

手紙の場合は、送り手にとっては「書く」と言う行為がことがらを客観視させる機会となろうし、また、相手の手元に届くまでの時間によって、両者の気分は、幾分なりとも沈静化の方向を辿るだろう。したがって、最近の事件当事者にしばしば見られる「突然、キレてしまった」というような言動は、こうした「言葉の機能の変質」との絡みで解きほぐす必要もあるのではないか。私たちがより注視すべきは、伝えられた内容にもまして、使用されたツールとツールのゆえにかつてとは異なった「コミュニケーション機能の変質」であるように思われる。

Eメールの言語は、いうまでもなく従来と変わらぬ文字言語であり、使用されるのはこれも従来と変わらぬ日本語であることが多い。そのために、私たちは、しばしば「機能の変質」に気付くことなく、相互のやりとりを、従来と変わらぬ言葉の往来として捉えてしまいがちであるのだが、彼らは、早々と、しかも軽々とその機能の変化に適応し、それを駆使しあるいはそれに駆使されて、自身の日常を展開させ、そのゆえの葛藤にも巻き込まれているのではないか。現代の子どもが、私たちの理解を困難にし、「子どもが見えない」「彼らは異星人のようだ」と嘆きの種とされるのは、おそらくはこうした事情に由来するものと思われる。これらを捉えて、世代間の断絶と把握するとしても、それは必ずしも誤りとは言えず、次代を主導するツールを先取りして、瞬時のためらいもなくそれらを活用してしまう子どもや若者と、一方、既存の文化内の住人である大人たちとの間に、いつか越えがたく見える裂け目が生じてしまったとしても、それは無理からぬことと言わねばなるまい。

さて、「子ども」の立脚点が、「異文化領域」であるにまして「異時間帯」で

あるとすれば、彼らとの関係修復は、いかにして可能だろうか。単純な言い方ではあるが、後を行く私たちが足を速めて、先を行く彼らに「追いつく」という手段が考えられる。しかし、このことは、単純ではあるがさほど容易ではない。なぜなら、現代社会の秩序は、既存の秩序内で既成の成長過程を辿り、既存の価値観を抱かされて成人した大人によって、維持され展開させられているものである。したがって、私たち大人が、既存の秩序の枠組みと価値の体系を解体し、新たな秩序と新たな価値観を作り出すためには、自分自身と自身の依拠する従来の生き方に疑義を呈し、そこからの脱皮転換を図ることから始められねばならないからである。

たとえば、私たちは、これまで親しんできた「語り言葉」や「書き言葉」から紡ぎ出されるコミュニケーション世界から、果たして脱皮することが出来るのか、否か。そして、発信者の直感を瞬時に受信者に送り届ける「メール言語」を肯定した上で、子どもたち以上に「メール言語の機能」に熟達することが可能なのか、否か。さらに、それらを子どもたちに効率よく伝えるための、新しい言語機能に関する「教育技術」をマスターし得るのだろうか。ただし、そのとき、大人たちが担うべき「文化の伝達」という教育機能は、どう位置付けることが出来るのだろうか。

さて、彼らに追いつき、さらには彼らを追い越して、従来のな上下関係での「子ども——大人関係」を維持することが困難であるとすれば、今一つの道は、先を走る彼らのために、立ち止まって「相手を待つ」A 地帯を用意することではないか。これまで、人類は、対面型のコミュニケーション手段を行使し、あるいは文書交換という手段によって、長い長い歴史を紡いできている。そして、その所産として、私たち人類は、他の種と

異なる独特の「文化」や「芸術」を生み出してきた。紙の上に記された詩や小説の面白さや、語り言葉で紡ぎ出される演劇の魅力など、立ち止まった彼らに伝えるべきことは少なくないに相違ない。

来るべき社会を先取りする子どもや若者と、既存の社会で現状の維持・貢献に労を呈する大人たちと、この両者の断絶が現代の宿命であるとすれば、私たちは、先を走る子どもや若者が小休止し、後を追う大人たちを待ってくれる場所を用意すべきではないか。そこは、両者が見つめ合い、お互いの発信するものを分かち合いつつ共通し得るものを探り当てる、そんな場所と時間なのである。そんな場所で、子どもたちは、彼らの言動を理解し兼ねて「異星人視」する大人たちの誤解を解く機会を持ち得るだろうし、また、大人たちは、彼らのために「文化の継承」という与えられた役割を行使することが出来る。子どもの「養育」と「教育」の役割が今後とも大人の肩に委ねられているとして、その責を果たすための「学校」とは、以上の意味での両者の出会いの場所であるべきではないだろうか。

(本田和子『それでも子どもは減っていく』による)

注1 神戸連続児童殺傷事件——一九九七年に神戸市で発生した事件

で、中学生(当時)による少年犯罪。

注2 長崎小六児童殺傷事件——二〇〇四年に長崎県で発生した事件

で、加害者・被害者ともに小学六年生の子供であった。

1 傍線部ア「おおらかに許容し得た」のは、なぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 次の文化を「先取り」するような子どもたちの言動を、大人が受け止めようとするから。

② 子どもたちとの差異が顕在化すると、大人が過敏になってその差異を埋めようとするから。

③ 子どもたちが生きるであろう時代の予測ができ、またその変化が適応可能な速度であるから。

④ 次に訪れるであろう近未来が予測不能であっても、適応する速度が時代の変化を上回るから。

⑤ 大人の文化とは異なる子どもたちの言動に対し、「子どもとはそんなもの」と捉えてきたから。

2 傍線部イ「強固なバリアが形成されている」とは、この場合どのような意味か。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 現代的物事が思春期の子どもの暮らしを支配しており、類のないほど強く結び付いているということ。

② 現代的物事によって家族間での相互把握が難しくなり、それによって人間関係が分断されているということ。

③ 現代的物事が家族間のプライバシーを守っており、それが現在の暮らしの特徴になっているということ。

④ 現代的事物が日常と密接に結び付いているために、親は思春期の子どもに配慮しなくなったということ。

⑤ 人間関係の希薄さが現代的事物によってさらに強化され、家族内の相互無関心を招いているということ。

3

傍線部ウ「メールによって変質を余儀なくされた「言葉の機能」とあるが、ここで述べられている言葉の機能のツールによる違いを説明したものと最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 言葉を投げかけ合うことで感情が激化するという点においては、対面でもメールでも同じである。

② 手紙は、書くという行為によって発信者が内省する場合があるのに対し、メールは直感のまま瞬時に送られる。

③ メールは瞬時に相手に届けられるので、相手からの返事も早く届き、手紙よりも多くのことをやりとりできる。

④ 対面の言葉は、相手の反応をもとに修正されることがあるが、メールでは相手の返事がくるまで修正されない。

⑤ メールは手紙と同じ文字言語であるが、内容や表現を吟味してから送信するまでの早さが、圧倒的に手紙と異なる。

4

傍線部エ「先を行く彼らに「追いつく」とは、ここではどのようなことを指すか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 既存の秩序内で獲得してきた価値観から脱却し、新たな秩序や価値観を創出すること。

② メール言語に熟達するだけでなく、それを子どもたちに効率よく伝えるための教育技術をマスターすること。

③ 自分自身の依拠する従来の生き方が、現代社会の秩序の中でどのような成長過程を辿ってきたかを探ること。

④ これまで親しんできたコミュニケーション世界から脱却し、子どもたち以上にメール言語に熟達すること。

⑤ 現代社会を維持している秩序や既存の価値観に疑義を呈し、それを解体して脱却を図ること。

5

空欄部 A に入る語は何か。文脈を考え、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 危険

② 空白

③ 衝突

④ 無風

⑤ 緩衝

6 傍線部オ「学校」とは、以上の意味での両者の出会いの場所であるべき」とあるが、筆者は学校をどのような場として捉えようとしているか。ここでの説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 大人と子どもがお互いの発信するものを分かち合うことで相互の異なりを理解し、両者の断絶が避けがたいものであるということを変更して認識する場として捉えようとしている。
- ② 従来のコミュニケーションツールによって生み出されてきた文化や芸術の魅力を対話を通して子どもに伝えることで、「文化の伝達」という教育的役割を果たす場として捉えようとしている。
- ③ 大人から子どもへと文化を伝達していくための場と捉えるだけではなく、大人と子どもが互いの文化や価値観を分かち合い、共通し得るものを探る場として捉えようとしている。
- ④ 次代の文化を先取りする子どもと、既存社会で現状維持に努める大人とが繰り返し対話をするような場所と時間が得られることで、お互いの誤解を解いていく場として捉えようとしている。
- ⑤ 大人が文化の継承という自身の役割を行使するために、子どもに次代のツールの先取りを小休止させ、伝統ある文化や芸術の魅力をじっくりと伝えていく場として捉えようとしている。

7 この文章の構成の特徴を説明する文として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 複数の事例を比較分析し、データを抽出した上で、それを根拠にして結論や提案を述べている。
- ② 時事をとりあげ、複数の観点を明示して多角的に考察を加えた上で、自身の考えや提案を述べている。
- ③ 結論や考えを示した上で、具体例やデータを挙げながら、検証したり裏付けたりしている。
- ④ 問題提起をした上で、それについての事例を挙げて現状分析を行い、自身の考えや提案を述べている。
- ⑤ 用語の定義を行った上で現状分析を行い、様々な立場からの考えを検討しながら、自身の考えを述べている。

二

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

誰が最初に気付いたのかは分からない。

しかし、ずいぶん前から気付いていた人がいたのは確かだ。

その昔、オバケ煙突というものがあつたという話を聞いたことがある。

東京の下町の火力発電所に大きな四本の煙突が立っていたのだが、見る方向によって、一本にも、二本にも、三本にも見えたりしたという。

消えたり現われたりするから、オバケ煙突。

それと似たようなものだろうか。

官庁街の外れの幹線道路の両側を挟む雑居ビルの壁。地下に潜り込む道路のトンネルの天井。そして、道路を越えて宙を走る、ケーブルを入れた大きな管。

それらの現物どうしは、実際にはかなりの距離があるのだが、ある方向から見ると、四本のタテとヨコの直線が組み合わされて、巨大な長方形の囲み枠に見えるというわけなのだ。

まるでドライブインシアターのスクリーンのように、という人もいた。

切り取られた空の向こうをゆっくりと雲が流れていく。

額縁みたい、という人もいる。

あたかも大自然のキャンパスの中を、飛行機が一筋の飛行機雲を残して飛んでゆく。

そして、たまたまここをよく通り、運よく気付いた人だけに見える大画面の特等席は、この古い歩道橋なのだった。

ここに、歩道橋の上で手すりに頬杖をつき、じつと一点を見つめている

少年がいる。

時刻は、午後。まだ日は高く、世界は明るい。

学校帰りだろうか。脇には使いこんだ黒い学生カバンが置かれていた。

歩道橋の上を行き交う通行人が、何を見ているのだろうと少年の目線の先に注目する。

しかし、そこには何もない。暮れていく空が、四角いスクリーンの向こうに見えるだけ。

中には、「まさか、飛び降りようとしてるんじゃないよね？」とばかり、不安げに少年の顔を覗き込む者もいる。

けれど、そのとろんとした、むしろ幸福感に満ちたまなざしを見ると、誰もが安堵したように表情を緩めてそっと立ち去るのだった。

また、別の日には、やはり歩道橋の上で直立不動のまま、その額縁の中に見入っている中年女性もいる。

夕刻である。日没には早いけれど、もう暮れ始めているという頃だ。

やはり、彼女の視線の先を気にする通行人。

しかし、彼女の目には何も浮かんていない。ただそこにいる。もしかすると、何も見えていないのかもしれない。あるいは、彼女の佇まいに、ま

るでこの世に彼女以外の者は存在しないかのような虚無を感じて、そそくさと立ち去る者もいる。

また別の日。

そのスクリーンに目をやったまま、呆然と立ち尽くす老夫婦もいる。小柄な二人が、寄り添うようにして遠くを見つめている。

時刻は、夕暮れである。少しずつ空が茜色に染まり始める時分。

二人はぼうつと同じところを見つめている。

その目付きは独特だ。驚いているような、あつけに取られているような、それでいて懐かしいものを目にしているような。

そして、私。

私もやってきた。

この場所に。

この歩道橋に。

この巨大な偶然のスクリーンを観^みに。

ただ、本当にその場所を探し当てたのかは、こうして立ってみて、その四角いスクリーンを目にしている今も半信半疑だった。確かに、しっかりと枠組みになっているのは間違いない。似たような場所は幾つか目にしたが、こんなにもかつちりと四角に区切られているのはこの場所が初めてだった。

本当にここなのだろうか。

私は棒立ちになって、ぼんやりと辺りを見回した。

最初に、そのなんとも頼りない噂^{うわさ}を聞いたのはいつのことだったろう。漠然とした噂。口にした人も自信なさげな、口にした後ですぐに打ち消してしまうような、しょぼい噂。

だが、妙に心惹^ひかれる噂ではあった。

まさか、そんなことあるはずないよね、と聞き流しつつも、心の片隅に留め置いてしまうような噂。

場所も、非常に漠然としていた。

とある県庁所在地の、官庁街の外れの、栄町交差点にほど近い古い歩道

橋。歩道橋の正面に地下に潜る幹線道路がある。

そんな場所が全国にどれくらいあるのか、見当もつかなかった。県庁所在地というだけで四十三ヶ所あるし、栄町という町名だってあまりにもありふれていて各地にある。

まるで雲をつかむような話であり、都市伝説にしても評判になるようなものではなかった。

しかし、私は忘れなかったし、他にも忘れなかった人がいたのだろう。しょぼくて頼りない噂ではあったが、消滅することはなく、しばらく間を置いては流れてきたし、辿^{たど}りつけた人もいる、という噂も途切れなかった。それでも、いつもそれ以上の情報はないのだった。

なので、私も氣長^{ひそ}に、密かに、探し続けていた。

決して熱心に、というほどではなかったけれど、常にどこかで氣に留めてはいる、という感じで。つまり、その噂に見合うような、いささか頼りなくてしょぼい程度の探索を続けていたのである。

職業柄、日本各地に行くことが多かったのもちょうどよかった。それも、月に一、二度のゆるい頻度で、ゆるい日程の仕事が大半なのも合っていた。「そういえば、ここも県庁所在地だったな」と思い出しては、朝早起きしてそれらしき場所に行ってみる、というくらいの熱意で候補地と思しきところを回ってみたいしていた。

もちろん、なかなか条件に合うところはなかった。

そもそも、前提条件が曖昧なのである。

県庁所在地の官庁街の外れ。「外れ」とはどの辺りを指すのか？ あるいは、どの辺りまでを「外れ」に含めるのか？ そこから判断に迷ってしまう。

しかも、「栄町交差点にほど近い歩道橋」である。

「ほど近い」とはどのくらいの距離を指すのか？ 五十メートル？ 百メートル？

「いちばん近い」歩道橋ではダメなのか？

現地の地図を見ながら、首をひねるのも毎度のことだった。

かなり、その条件に近いところが、これまでに三ヶ所ほどあった。

そう気付いた時の、胸のときめきは今でも記憶に新しい。

もしかして、ここ？

何度も確かめる。歩道橋、雑居ビル、地下に潜る幹線道路。相当いい線

いつてるんじゃない？

しかし、どれかが欠けていた。頭上の管。トンネル。あるいは、「栄町交差点」ではなかったりした。

歩道橋の上を何度も歩き、どこかで四角い枠が現われるのではないかと
きよろきよろする私は、かなり怪しい人だったはずだ。枠が見つからない
ことをあきらめきれず、長いことぐずぐずしていたのも一度や二度ではな
い。

がっかりしながら引き揚げたあの三ヶ所は、今でも頭の中に焼きついて
いる。

そんなこんなを繰り返した挙句。

全く意識していなかった時に、この場所に出くわしたのだ。

たまたま帰省していて、墓参りの帰りに通りかかった場所。

何の気なしに歩道橋を上がり、渡ろうとして、何かが気にかかって足を
止めた。

うん？

ふと脇に眼をやった私は、そこに巨大な四角い枠を見つけたのである。
えっ。

思わず辺りを見回した。

トンネルに吸い込まれていく車、車、車。頭上には、宙を渡るがっちり
とした鉄の管。左右に聳える雑居ビル。

ここ？ 何度も通っていたはずのここ？ 郷里のここだったの？

私は呆然とした。

そして、誰もそれ以上の情報を上げてこなかった理由が分かったような
気がした。

その場所にはあまりにも殺風景であり、あまりにも見過ごされてきた場所
だったし、事実、私もこれまできちんと景色を目に留めたことすらない場
所だったのである。

まさか、こんな何もない、がらんとした場所をそこだと言いたくはな
かったし、本当にそこであつたら、ますます言いたくなくなるのは確実
だった。

それでは、もしここがそうだったとして、それが知れ渡つたらどうな
る？ ここ目掛けて全国から人が押し寄せ、押すな押すな騒ぎになつた
ら？

それは困る。行政がこの事実を嗅ぎつけたら？ 町おこしに使うだろう
か？ それとも、迷惑に思うだろうか？ なにしろ、恐らくは奇跡的な偶
然のバランスで成り立っている風景なのだ。今、目にしてみても、歩道橋
はかなり古く、階段は腐食してぼろぼろだし、通路もたわんでいる。額縁

の上のヨコ線であるケーブルを収めた管も、頑丈そうではあるが相当老朽化している。雑居ビルも古く、片方のビルはほとんど使われていないようだ。

どの線が欠けても額縁にはならないし、どの線がいつ撤去されても不思議ではない。

そう考えると、今ここにいられて、この強固な四角い枠を目にしているのがまさに奇跡のように思える。

だが、問題はその先だ。あの噂が本当だったのかどうかは、まだ分からないのである。

いったい、それが事実だとどうすれば分かるのだろうか？

少年は見ている。

歩道橋の上に頬杖を突き、夢見るようなまなざしで、四角い枠の中を。

その中に、映し出されている光景を。

ゆっくりと草原を駆けるラブラドル犬。大きくて、立派な犬だ。艶々つやつや

した毛並みが、陽に照らされて輝いている。

スローモーションだ。

音はない。

ピンク色の舌が覗く口。きらきらした眼は、笑っているように見える。

一緒に駆けている子供。四、五歳だろうか。その背丈は犬と同じくらいだ。

こちら満面の笑みだ。犬も、子供も、無心に駆けている。互いに全幅の信頼を置いていて、分かちがたいコンビのように、一体感を持って走り続けている。

子供の顔は、それを歩道橋の上から眺める少年によく似ている。いや、正確に言えば、彼の子供の頃のようなのである。

少年はうつとりと眺めている。

彼の眼には、草原を走る犬と子供が映りこんでいる。確かに、彼にはその姿が鮮明に「見えて」いるのだ。

幸福な風景。彼のいちばん好きな風景。少年はうつとりとその景色を眺め続ける。

中年女性も見ている。

凍りついたように、スクリーンの中にその光景エを見ている。

本当は見たくはない光景を。

なのに、見ずにはいられない光景を。どうしても見てしまう光景を。

画面は暗かった。

いや、暗いのではなく、画面の大部分が黒く濁った、何か不穏なもので占められているのだ。その、黒くて暴力的なものが、ゆっくりと蠢うごめいている。

いる。

スローモーションだ。

音はない。

黒いものは徐々にこちらに近付いてくる。圧倒的な質量で、建材や車や、看板や自転車など、ありとあらゆるものを巻き込み、呑み込み、渦巻き立ち、白いしぶきを上げ、巨大な面となってみるみるうちに迫ってくる。

彼女は動けない。

しかし、眼を離せない。

凍りついた場面、彼女の中に焼き付けられ、凝こじった場面を、彼女はスク

リーンの中に見つめているのだ。
老夫婦も見ている。

もはや存在しないものを。かつては存在していたものを。かつては当たり前だと思っていたもの、いつまでも続いていくと思っていたものを。

画面の中には、賑やかな色彩があった。

大勢の人たちがいる。

どの顔も笑顔だ。動いている。手を振っている。手を叩いている。

スローモーションだ。

音はない。

なのに、画面からは歓声やお囃子が聞こえてくるようだ。太鼓の音や、掛け声があふれ出してきそう。

神輿が揺れ動いている。上下に、左右に。ねじり鉢巻に法被を着た大勢の担ぎ手たちが、リズムカルに神輿を運んでいる。

誰かが水をかけ、きらきらと水飛沫が宙を舞う。

沿道で掛け声をかける人々。

子供たちが小さな手を叩く。うちわが揺れる。

笑いさざめく老若男女の顔、顔、顔。

山車もやってくる。立派な山車だ。鮮やかな前懸や胴懸の付いた、極彩色の山車がゆっくりと進んでくる。

山車の上で鈴なりになってお囃子を演奏する子供たち。山車につかまり、大きく扇子を振って誘導する男たち。

沿道の家の二階から、山車を見上げる人々。どこも祭を見物する人でいっぱい。

徐々に画面は日が暮れてゆく。

それにつられて、ぼつりぼつりと提灯に明かりが灯る。淡く優しい光が、画面のそここに増えてゆく。

老夫婦は魅入られたようにその光景に見入っている。

こんなにも美しいものだったのか。

こんなにも尊いものだったのか。

こんなにも儂いものだったのか――

口には出さないが、二人はそのことに驚いている。衝撃を受けている。

胸が締め付けられるように思う。

彼らは見つめている。彼らにはそれが確かに見えているのだ――

そして、私。

私も今、ここにいます。

改めて、ここにやってきた。

その光景に出会うために。

不安と期待に押しつぶされそうになりながら、私は歩道橋の上に立つ。

足元から、車がトンネルに吸い込まれる轟音が上がってくる。背後から

は強い風が吹きつけてくる。

そう、それは他愛のない噂だった。その日、その時間にその場所に行けば、そのスクリーンの中で、かつて大事にしていた記憶に出会えると。

この日。じきにその時間になる。

あの大事な記憶。大事なひと。

私はじりじりしながら、歩道橋の手すりをつかみ、身を乗り出す。

目の前に広がる、四角い額縁。

ここだけで目にするこのできる、巨大なスクリーン。
まだ何も見えない。

(恩田陸「歩道橋シネマ」による)

- 8 傍線部ア「じつと一点を見つめている」とあるが、少年が見つめているものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 見る方向によって、一本にも、二本にも、三本にも見えたりしたというオバケ煙突
- ② 空の向こうをゆつくりと雲が流れていく様子を映している、偶然の四角いスクリーン
- ③ あたかも大自然のキャンパスの中を、飛行機が一筋の飛行機雲を残して飛んでゆく様子
- ④ 歩道橋の上に佇んでいる自分の顔を不安げに覗き込む、歩道橋の上を行き交う通行人
- ⑤ 草原を無心に駆けている、大きな犬と少年によく似た四、五歳くらいの子供の姿

- 9 傍線部イ「最初に、そのなんとも頼りない噂を聞いたのはいつのことだったろう」とあるが、噂を初めて聞いたときの印象として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。
- ① 心に留めたい魅力はあるものの、とても事実とは思えない。
 - ② 場所の情報もある程度は判明しているので行ってみたい。

- ③ 職業柄、都市伝説には興味があるので探索したい。
- ④ 漠然とした条件に当てはまる場所をぜひ解き明かしたい。
- ⑤ 仕事で各地の県庁所在地に行った際には候補地を回ろう。

- 10 傍線部ウ「あまりにも見過ごされてきた場所だった」とあるが、この表現が物語全体に持つ意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 舞台装置としてあまりに殺風景でつまらない場所だということ。
- ② 何気ない日常の中にも、大切な意味や価値が潜んでいること。
- ③ 何も思い入れのない場所にこそ運命的な出会いがあること。
- ④ 都市伝説は気付かないだけで身近に存在するということ。
- ⑤ 人々は平凡なものには目が留まらない愚かさがあるということ。

- 11 傍線部エ「その光景」を中年女性が見てしまう理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。
- ① 自分の内面に渦巻く恐怖を具現化したような怪物に対して、その正体を見極めようとする思いから。
 - ② 大切な場所が暴力的な何かに奪われていく様子を前にして、何もできないながらも見届けたいから。
 - ③ 自分のこれからの未来に訪れるであろう漠然とした不安に対して、立ち向かおうという覚悟があるから。
 - ④ 過去に自分が犯した罪が、黒く暴力的に蠢く実体を持って迫ってくるのに対して体が動かないから。

⑤ 自らの中に蠢く、黒く不穏な欲望の塊が、あまりに魅惑的で目が離せなくなっているから。

12 傍線部オ「老夫婦も見ている」とあるが、何を見ているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- ① 現実よりも美化されて映し出されていた祭りの華やかさ。
- ② 無音の映像から幻聴のように伝わる祭りの音や熱気。
- ③ 今は失われた祭りの記憶とその喪失感が交錯する美しさ。
- ④ 老いた今ではもはや参加することのできない祭りの儚さ。
- ⑤ 笑顔の群衆や祭りが現す理想化された共同体の尊さ。

13 本文中の「噂」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 奇跡のような偶然で、雑居ビルやトンネルの天井、配管が組み合わさり、映画館のスクリーンのような巨大な長方形の囲み枠から風景を見ることが出来る歩道橋がどこかにあるという噂。

② ある県庁所在地の夕刻の歩道橋に立って、街が偶然に作った四角い枠の中を眺めると、見る者にとってもっとも幸福な風景、二度とは戻らない美しく尊い風景を見ることが出来るという噂。

③ とある県庁所在地の、官庁街の外れの、栄町交差点にほど近い古い歩道橋に行って空を眺めると、見る者にとってもっとも望んでいるこれからの自分を見ることが出来るという噂。

④ ある日、ある時間に、とある県庁所在地のとある歩道橋に行くことができると、偶然が作ったスクリーンの中に、自分にとって忘れることのできない過去の思い出に会えるという噂。

⑤ 忘れ去られたような場所にある古びたとある歩道橋に行くことさえできれば、そこに現れる巨大なスクリーンの中で、自分にとってもっとも大事な誰かに出会えるという噂。

14 「スローモーション」「音はない」という表現が繰り返される効果や意図として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① スクリーン上で上映されているシネマが、スローモーションを用いたサイレントムービーであることを強調している。

② 読者が登場人物のしている情景を理解しやすいように、シネマに用いられている映像技法を繰り返し説明している。

③ スクリーンが、登場人物たちの望む映像をじっくりと見せるために、臨場感を切り捨てているということを表現している。

④ この小説を映画化したときに、視聴者が現実のシーンとスクリーン上のシーンを見分けやすくなるような工夫となっている。

⑤ 時間がゆっくり流れていることや無音であることを繰り返すことで、現実とは切り離された夢想的雰囲気強めている。

三

次のA～Dのそれぞれの設問に答えなさい。

A

15～17の各文の傍線部のカタカナを漢字に改めたとき、それと同じ漢字を傍線部のカタカナに含むものを、それぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

15

ゆったりとカンダイに接する。

① カンヨウ植物を大事に育てる。

② カンヨウにまとめられた文章だ。

③ 何事も辛抱がカンヨウだ。

④ カンヨウに従って行動する。

⑤ カンヨウの精神をもって当たる。

16

彼女のコウセキは、後世に語り継がれるだろう。

① 日本の名所キウセキを巡る旅に出る。

② 解決すべき課題がサンセキしている。

③ 食べるものにも困るほどセキヒンの生活をしている。

④ そのボウセキ工場では、特殊な糸が生産されている。

⑤ このプロジェクトは、ジヨウセキ通りに進めよう。

17

その資料は、歴史的にとってもキチヨウなものである。

① 多様性を認めることが時代のチヨウリュウとなつてゐる。

② 彼の提案は、会議の場でチヨウシヨウされた。

③ この銅像は、平和のシヨウチヨウとなつてゐる。

④ 今は感情的になつてゐるので、発言をジチヨウする。

⑤ 彼の体調不良は、病気のヨチヨウかもしれない。

B

18・19の四字熟語の空欄に入る漢字を、それぞれ後の①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

18

一網打 (一度にまとめてとらえること)

① 人

② 尽

③ 刃

④ 迅

⑤ 甚

19

千載一 (めつたにない機会)

① 隅

② 宮

③ 偶

④ 寓

⑤ 遇

C ②〃 ②の各文の意味をもつ表現として正しいものを、それぞれ後

の①〃⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

20 自分に都合のよいようにはからうこと。

- ① 唯々諾々(いいだくだく)
- ② 我田引水(がでんいんすい)
- ③ 以心伝心(いしんでんしん)
- ④ 自画自賛(じがじさん)
- ⑤ 自業自得(じごうじとく)

21 すじみちが立たないこと。

- ① 支離滅裂(しりめつれつ)
- ② 諸行無常(しよぎようむじよう)
- ③ 暗中摸索(あんちゆうもさく)
- ④ 虚々実々(きよきよじつじつ)
- ⑤ 五里霧中(ごりむちゆう)

22 どうにもならないことを後悔すること。

- ① 手をこまねく
- ② 固唾かたずをのむ
- ③ 腹にすえかねる
- ④ 腹をくくる
- ⑤ ほぞをかむ

D 次の文章の空欄②3・②4に当てはまるものとして最も適切なものを、

それぞれの①〃⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

父親は明治時代の小説家。明治三十七年、東京に生まれた②3は、父の死後、『雑誌』『終焉しゆうえん』『父』などの回想文で文壇に登場した。芸者置屋での仲居経験から生まれた長編小説『流れる』なども評価が高い。次いで書かれた長編小説②4は、繰り返しドラマ化、映画化されている。

23

- ① 樋口一葉
- ② 三浦綾子
- ③ 幸田文
- ④ 宮本百合子
- ⑤ 林芙美子

24

- ① 『貧しき人々の群』
- ② 『たけくらべ』
- ③ 『放浪記』
- ④ 『氷点』
- ⑤ 『おとうと』

(以上で問題は終わります。解答票の解答番号②5以降は使用しません。)